

参考資料

「将来像」

「年間指導目標」

「主体性を引き出す3つの観点」

「将来像」とは…

「将来像」とは、本校の「キャリア教育の視点」です。

本人及び保護者の願いを基に児童生徒の自己実現に向けて、知的障害のある児童生徒に対する、一人一人に応じた、一貫性・系統性のあるキャリア教育の在り方を考えた研究の成果です。

児童生徒が卒業後に過ごす場は、主に「家庭」「職場」「余暇の場」の3か所です。本人及び保護者の願いを基に児童生徒の3つの場における将来像を作成することで、児童生徒の自己実現にむかう取り組みを、一人一人に応じて、一貫性・系統性をもって行うことができると考えています。

【将来像の定義】

将来像は、自己実現をしている生活を想定した、児童生徒の23～25歳時の姿

小学部段階では、働く生活を開始するまでに長い年月があるため、「将来の生活を描き始める時期」と位置付け、将来像の「設定」に焦点を当てます。次に、中学部段階では、小・中・高の12年間の学校生活が後半に入る段階であることを踏まえ、「将来の生活について考えを深めていく時期」と位置付け、将来像の「具体化」をめざして実践を行います。高等部段階では、学校生活からの卒業と働く生活の始まりが近づいている段階であり、「卒業後の生活の在り方を考え、決定していく時期」であることから、将来像の「現実化」をめざした実践を行います。

この将来像の取り組みを軸として、各学部の生活年齢による時期の特徴を押さえ、学部間における系統性のある取り組みを目指しています。

「家庭」「職場」「余暇の場」の3つの場

本校の将来像は、「児童生徒23～25歳時に、自分の力を最大限発揮して、生き生きと生活している様子」を生活の3つの場から考えます。

表1 中学部の将来像の例

子供の将来像		将来像	
		中学部 ○年 氏名 ○○○○	
将来像(自己実現をしている生活を想定した、本人の23～25歳時の姿)			
家庭の場における将来像	職場における将来像	余暇の場に関する将来像	
<ul style="list-style-type: none"> ・買い物や留守番、洗濯を一人で行うことができ、家事の手伝いをしている。 ・簡単な料理をすることができていて、料理をすることやその料理を振舞うことを楽しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活面が自立している。 ・人とかかわることが好きで、自分から働きかけ、職場の同僚と友好的な関係を築いている。 ・自分で気づいて行動していて、時間を意識して頼まれた仕事に最後まで取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・優しく友人を気遣うことができている、友人を誘って映画を見に行ったりするなど、人と活動することを楽しんでいる。 ・計画を立てて友人と旅行に行くことがある。 ・スポーツ教室に通っている。 ・マラソン、バスケットボールなどの運動サークルに入って週末に活動している。 	

将来像の成果

将来像や、将来像作成の観点から実践を導いた取組から、4つの成果が得られました。

(1) 一貫性のあるキャリア教育のモデル

将来像の定義や考え方を基に「自分の力を最大限発揮し、生き生きと生活している姿」(自己実現)を見据え、小中高のどの児童生徒にも、一貫して将来像を軸とした取り組みを行うことができます。

各学部の将来像の位置付け、作成の観点を表2に示しました。小学部では「設定」、中学部では「具体化」、高等部では「現実化」という一貫性をもたせ、小中校の12年間を通して、キャリア発達を促すことを目指しています(図1)。

表2 各学部の将来像作成の観点




	将来像の位置付け	将来像作成の観点
小学部	将来像の設定 高等部を卒業し、働く生活を開始するまでに長い年月があることを踏まえ、「将来の生活を描き始める時期」と位置付け、児童が「よさ」を発揮し、活躍した場面を集め、将来像の「設定」を行う。	 ○将来につなげたいよさ
	将来像の具体化 小・中・高の12年間の学校生活が後半に入る段階であることを踏まえ、「将来の生活について考えを深めていく時期」と位置付け、将来像の「具体化」をめざして実践を行う。	 ○行動の基となる能力 ○支援の方法と程度
高等部	将来像の現実化 学校生活からの卒業と働く生活の始まりが近づいている段階であることを踏まえ、「卒業後の生活の在り方を考え、決定していく時期」と位置付け、将来像の「現実化」をめざして実践を行う。	○場面 ○かかわり ○実態 ○金銭収支 ○社会状況 



図1 一貫性のあるキャリア教育のモデル

(2) 系統性のあるキャリア教育のモデル

将来像に基づいた実践の結果、将来像作成の観点について、図2のような系統性が見られました。将来像作成の観点は、生活年齢に応じた段階にそって、整理・発展していくと考えています。

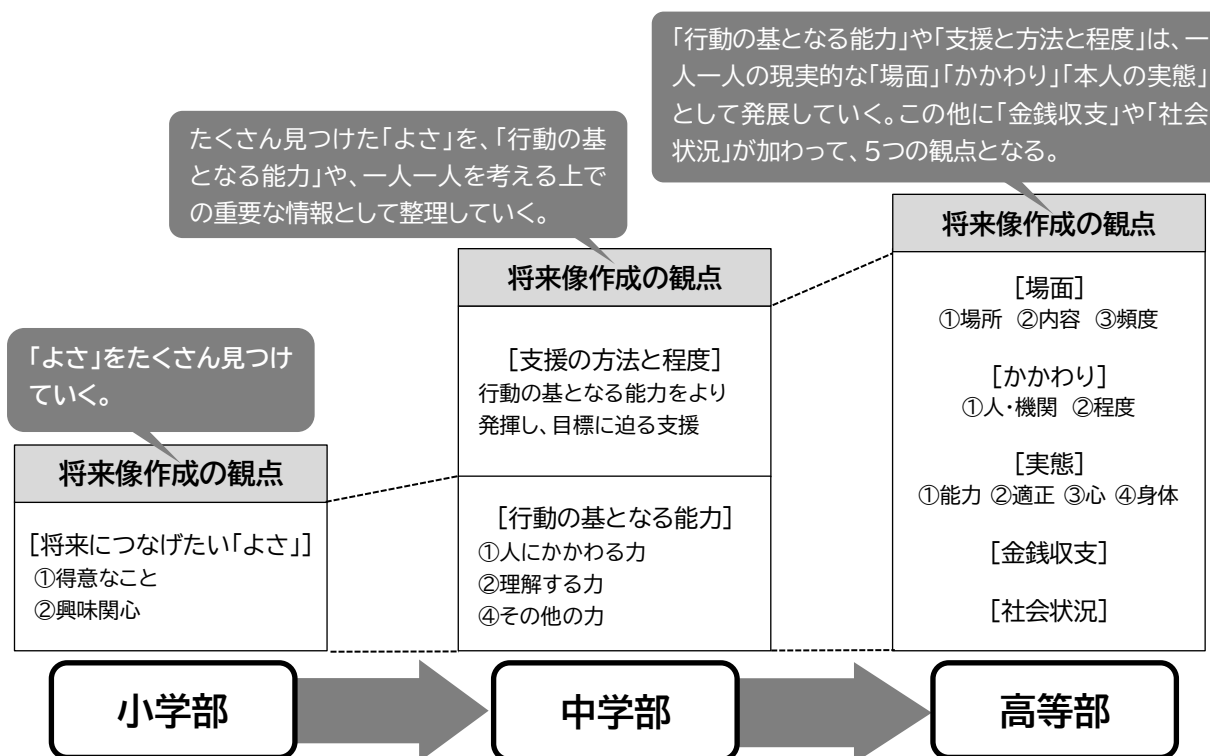


図2 系統性のあるキャリア教育のモデル

(3) 将来像を軸とした共通の視点による共通理解の深まり

将来像を軸にした取り組みの中で、将来を見据えた共通の視点で教員が児童生徒を共通理解し、共通の支援にむかう仕組みを構築することができます(図3)。

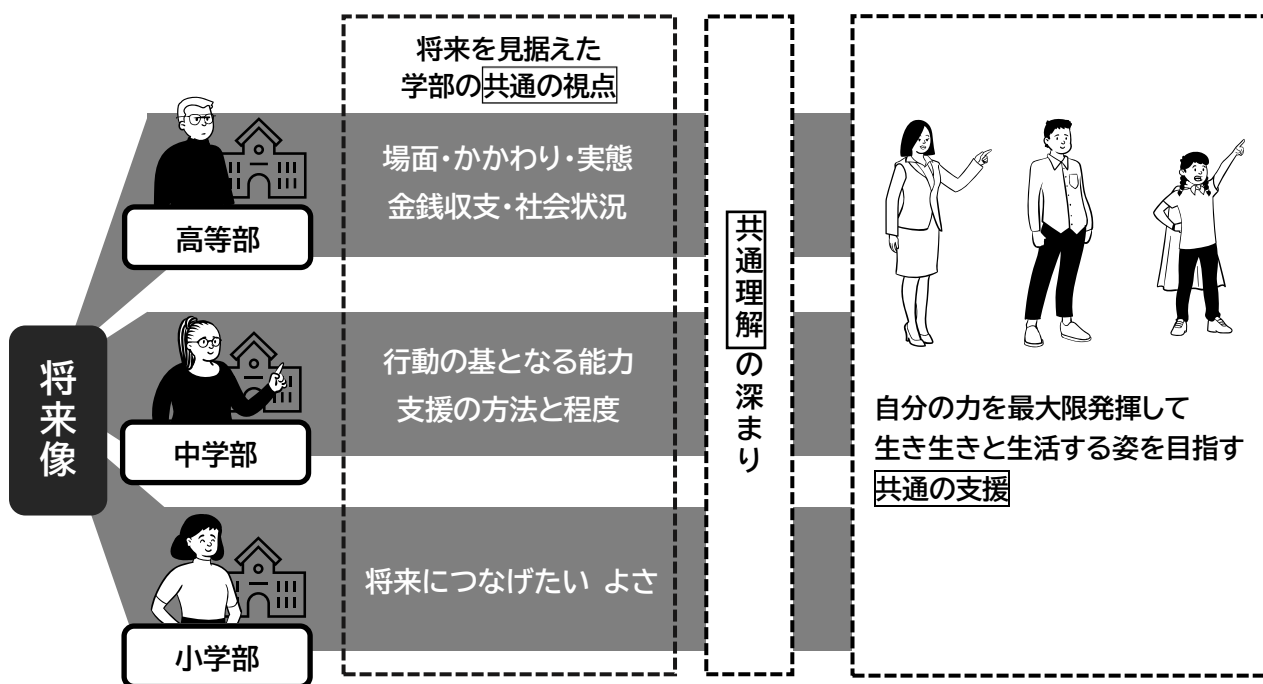


図3 将来像を軸とした共通の視点による共通理解の深まり

(4) 授業における「生き生きとした姿」の重要性の確認

将来像作成の観点からは、各学部の「生き生きとした姿」を目指した実践や、実際の授業における生き生きとした姿から導き出されました。このことから、自己実現に向かうために、今を「生き生き」と過ごすことが将来の「生き生き」へとつながることの大切さを確認することができました（図4）。

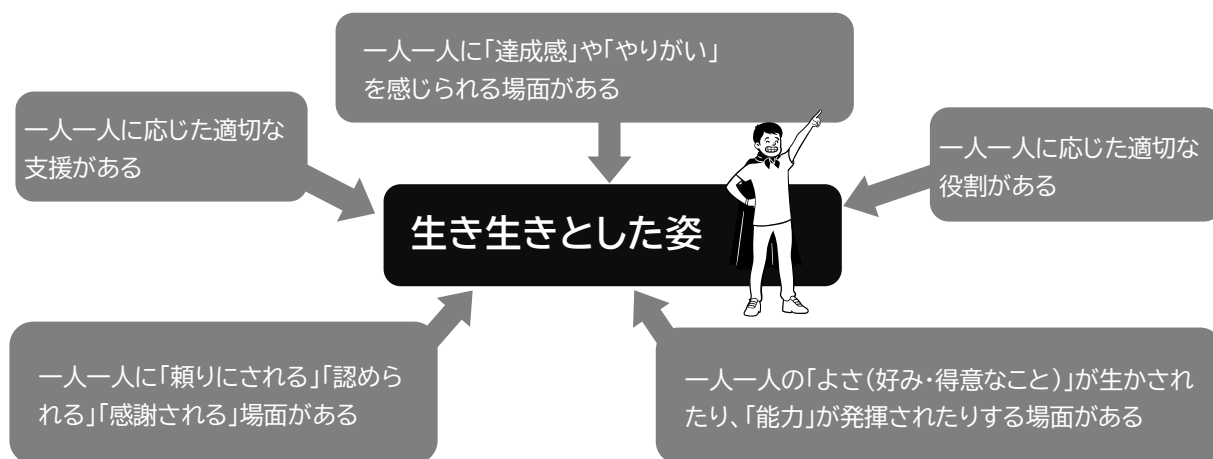


図4 授業における「生き生きとした姿」につながる要素

「年間指導目標」とは…

個々の児童生徒の自立と社会参加を目指した個別の重点目標です。

本校では、個々の児童生徒の自立と社会参加、「将来像」を目指して、個別の支援計画における長期目標を設定しています。その長期目標の達成に向けて、1年間で目指す姿を具体化したものが「年間指導目標」という個別の重点目標です。この「年間指導目標」は、基本的に全ての指導形態で取り組むものであり、それぞれの指導形態において目指す姿を目標として設定してきました。

また、これまでは本校の個別の指導計画では、この「年間指導目標」に基づいた各指導形態における目標を設定、評価を中心に行って来ました。

「年間指導目標」は、個々の児童生徒の発達・成長に寄り添いながら、学校教育目標が掲げる自立と社会参加を目指すための重要な取組です。一方で、本研究を通して、教育課程上の位置付けやその内容についての整理の必要性も明らかになっています。今後、教育課程の見直し・改善の中で、それらの課題の解決を目指しています。

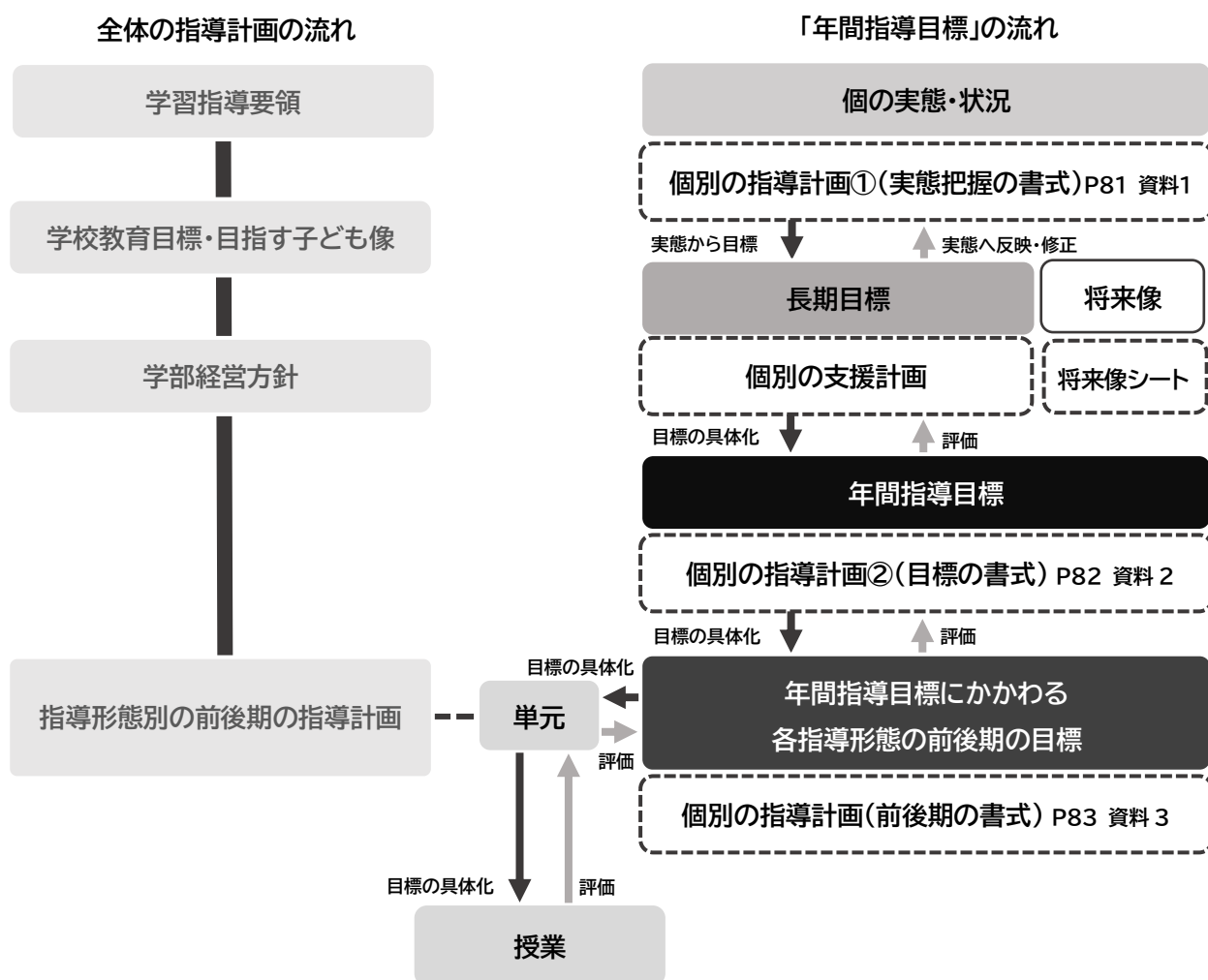


図5 「年間指導目標」にかかわる目標設定・評価の流れ

取扱注意

個別の指導計画（年間）①

令和〇年度

埼玉大学教育学部附属特別支援学校

中学部〇年 〇〇 〇〇

記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

1 現在の状況

<p>健康の保持 (日常生活面、健康面など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・荷物整理、排泄などの身辺処理は概ね自立している。 ・衣服を丁寧にたたんだり、蝶結びで紐を縛ったりすることができる。 ・ジッパーの上げ下げやシャツのボタンは、一人でとめることができる。襟ややシャツの裾を整えるが難しく、自分では気がつかないことが多いが、場面に応じて言葉掛けを受けることで正しく着ることが出来る。 ・短い箸を使う練習をしていて、操作に向上が見られ、後も継続して食事の仕方は練習していく必要がある。 ・体が熱いと感じることがあり、自分では発熱等に気づきづらい。また、手洗が必要なことがある。
<p>心理的な安定 (情緒面、状況の理解など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい環境や、慣れていない人の前では思ったことや要求を伝えられないことがあるが、慣れてくることで、自分から気になる出来事や興味のある話題について話をすることが多く見られるようになる。
<p>人間関係の形成 (人とかかわり、集団への参加など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・慣れてきたり、経験することで自信がついたりすることで、自分からやりたいことを他者に伝えたり、集団の中で友だちの意見を聞いて、一緒に活動したりすることができる。 ・教員や友だちが取り組む様子、写真やイラストを用いたスケジュールをもとに活動の内容を理解し、自信がつくことで積極的に取り組むことができる。 ・友だちの様子を気にかけて、声をかける姿が見られるなど、他者を意識した行動も多く見られるようになってきた。
<p>環境の把握 (感覚の活用、認知面、学習面など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平仮名、片仮名を使って2～3語文程度の日記を書くことができる。学校生活や日常で目にする漢字に興味をもち始めている。 ・硬貨の種類を見分けて100円玉/10円玉/1円玉を用いた支払いができる。500円/50円/5円の使い方を練習している。 ・デジタル秤で重さを比べたり、30cm定規を用いて長さを測ったりすることができる。調理等で正確な量を測ることを練習している。
<p>身体の動き (運動・動作、作業面など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・持久走で15分間一定の速度で走り続けることができる。 ・手先が器用で、ハサミやカッターなどを使って工作することを好む。細かなビーズを使った飾り作りなども指先に集中して丁寧に取り組む姿が見られた。 ・休み時間も体を動かすことを好み、教員の手本を見ることで振り付けを覚え、友だちと一緒にダンスを楽しむことができる。
<p>コミュニケーション (意思の伝達、言語の形成など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・慣れるまで時間がかかるが、人とかかわることを好み、教員や友だちに元気よくあいさつしたり、遊びに誘ったりするなどのかわりをもつことができる。 ・ゲームや競争などを楽しむことで集中力が高まる。 ・自分から心を開くことができる。
<p>特記事項 (性格、行動特徴、興味関心など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・慎重な性格で、新しいことに挑戦する前によく確認する。 ・積極的に活動に参加することが出来る。

自立活動の6区分
27項目に着目した
実態把握

個別の教育支援計画との
連携

2 長期目標

目 標	評 価 ・ 分 析
<p>必要な情報をもとに判断したり、他者に相談したりして、自ら選択・決定をしながら活動することができる。</p>	
<p>相手や場面に応じた適切な態度で、自分の意志や要求を伝えることができる。</p>	

資料-1 本校の個別の指導計画書式・実態把握の書式（年間計画①）

取扱注意

個別の指導計画（年間）②

令和〇年度

埼玉大学教育学部附属特別支援学校

中学部〇年 ○○ ○○

記入者 ○○ ○○ ○○ ○○

年間指導目標

目 標	手だて	評 価 ・ 分 析
①活動内容と活動時間をもとに取り組み順番を決め、自分で作ったスケジュールに基づいて活動を継続することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 目的や目標を明確にする。 役割の分担や内容を明確にする。 手本や見本を提示し、活動内容を写真や具体物を基に説明する。 手順や工程等をイラストや写真、簡単な文章を用いた手順書で提示する。 手本や完成形を提示し、注意点を分かりやすくする。 達成感/自己効力感を高められるよう、興味関心の高い題材や課題設定を行う。 仲間と一緒に活動する場面、手本やモデルとなる仲間を含めた集団、ペアリング/グルーピングを設定する。 	<p>お茶出しや洗濯、配布物係の仕事などを、家事活動の時間内に終わらせられるように、活動の順番を自分で決めて、そのスケジュールに沿って取り組むことができた。生活単元学習のお店作りでは、自分と友だちの役割を理解し、自分の役割について活動の順番を考えたり、友だちと役割を交代したりしながら活動を進めることができた。以前は自分のやりたいことを優先してしまう場面も多かったが、その時間にどこまで進めるかを考えたり、「あと〇時間でここまでやらなきゃいけないから」と見通しをもって取り組んだりすることが増えた。これは、活動の目的や目指している完成形等を、写真やイラスト、簡単な文章で提示したことで、活動の目的や目標についての理解が深まり、「何のために」「なぜ」という意味や目的を、「そのためにはどうしたらいいか」という方法や活動順へと考えを進められるようになってきたからだと考えられる。物事に集中して取り組み、理解力も高いため、今後はさらに、判断基準や選択肢を提示することで、「判断する」という力をつけ、場面や状況に応じて自ら判断しながら活動できる姿を目指していきたい。</p>
②適切な言葉遣いや態度を、定型文やモデル等を基に覚え、場面に応じて他者とかわることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 場面に応じた応答のモデルや定型文を言葉や文字で提示し、繰り返し経験する場を設定する。 うまく表現できない本人の思いや感情を教員が言葉にして本人がその言葉を繰り返したり、カードから選択したりする。 より多くの語彙や表現に触れ、経験を積めるように授業や日常生活での言葉を用いたコミュニケーションを促す。 手本やモデルとなる仲間とのペアリング/グルーピングを設定する。 正しいかわりや適切な態度ができたときに、どの部分がよかったのかを具体的に称賛する。 	<p>授業や活動の終わりの反省・振り返りの発表で、使える語彙が増え、自分の感想等をより多く発表しようとする姿が見られるようになってきた。また友だちへの働きかけ方では、自分から声をかけたり、肩をたたいて注意を促したりするなど、より適切な方法での働きかけが増えた。適切な会話のモデルの提示や言い直しによる表現方法の獲得、仲間との好ましいかわり方の経験の積み重ねにより、「伝える」ことへの自信と意欲が向上したこと、様々な状況に応じたかわり方を経験したことが理由として考えられる。一方で、以前よりも減少してはいるが、困ったときに、自分から周りに助けや支援を求められず、もじもじしていることもある。</p> <p>さらに他者とかわる経験を増やすことで、より幅広い状況への対応の仕方を覚え、自信をつけていけるだろう。今後も相手や場面に応じたかわり方を身につけていくことで、さらに自分の思いや考えを他者に伝えられるようになっていってほしい。</p>

取扱注意

個別の指導計画（令和〇年度：前期）

埼玉大学教育学部附属特別支援学校

中学部〇年 〇〇 〇〇

記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

1 年間指導目標（個別の指導計画〈年間〉と同じ）

目 標	
①	活動内容や活動時間をもとに取り組み順番を決め、自分で作ったスケジュールに基づいて活動を継続することができる。
②	適切な言葉遣いや態度を、定型文やモデル等を基に覚え、場面に応じて他者とかわることができる。

2 指導目標の達成に向けて必要な手だて（個別の指導計画〈年間〉と同じ）

手だて	
・	目的や目標、役割分担や内容を、文字とイラストを用いて提示し、いつでも見られるように掲示する。
・	手本や見本を提示し、活動内容を写真や具体物を基に説明する。
・	手順や工程等をイラストや写真、簡単な文章を用いた手順書で提示する。
・	手本や完成形を提示し、注意点を分かりやすくする。
・	達成感/自己効力感を高められるよう、興味関心の高い題材や課題設定を行う。
・	仲間と一緒に活動する場面、手本やモデルとなる仲間を含めた集団、ペアリング/グルーピングを設定する。
・	場面に応じた応答のモデルや定型文を言葉や文字で提示し、繰り返し経験する場を設定する。
・	うまく表現できない本人の思いや感情を教員が言葉にして本人がその言葉を繰り返したり、カードから選択したりする。
・	より多くの言葉や表現に触れ、経験を積めるように授業や日常生活での言葉を用いたコミュニケーションを促す。
・	手本やモデルとなる仲間とのペアリング/グルーピングを設定する。
・	正しいかわりや適切な態度ができたときに、どの部分がよくったのかを具体的に称賛する。

3 前期の指導目標

	指導目標	評価・分析
日常生活の指導	<p>①時間内に終わるように、家事や系の活動の順番を自分で決めて、活動に取り組むことができる。</p> <p>②定型の表現や言い方を用いて、朝の会/帰りの会の司会や、系の活動報告を行うことができる。</p> <p>③家事や系活動の中で、適切な表現や態度で報告をすることができる。</p>	<p>①家事と係の仕事を示すカードを作り、活動順を考えながらカードを並べることで、順番を考える習慣がついた。考えた順番に沿って活動したり、活動後にカードの順番とその日にかかった時間を合わせて考えたりしたことで、時間内に終わるように順番を工夫して考えることができるようになった。</p> <p>②台詞を記した進行表を見ながら、その場にあった言い方で司会や活動報告ができた。自信がなさそうときには言葉掛けや必要な言葉を教員が伝えることで、適切な言葉遣いや表現で伝えられることが増えた。</p> <p>③手本を示し、繰り返し取り組んで習慣化したことで、家事の終了時に「〇〇が終わりました。次は〇〇をします。」、係活動時に他の生徒にかかわる際に「〇〇くん、〇〇するといと思います」のように丁寧な言葉遣いでかわることができた。</p>
朝会・運動	<p>①マラソンで15分間に走り切れる周数を考え、目標周数を走り切ることができる。</p> <p>①サーキットで10分間に回れる周数を考え、各関門の動きに正確に取り組みながら、目標の周数を回ることができる。</p> <p>②マラソンやサーキットの準備や片付けに、自分から友だちにはたらきかけて一緒に取り組むことができる。</p>	<p>①昨年の経験を踏まえて、当初は10周を目標に取り組んだ。記録されたタイムを比較することで、より早く走ることを意識できるようになり、自分から目標を11周にすると決めて走ることができた。</p> <p>①目標を5周として、友だちと競うことで、より多く回れるように取り組む姿が見られた。動きの正確さについて、後期はロープ引きの関門の動きをより腕の力で持ち上げられるように意識させた。</p> <p>②ロープ引きの砂袋運びに友だちと一緒に取り組んだ。自分から声をかけ、友だちを呼んで片付けに取り組む姿が見られた。</p>
生活単元学習	<p>①活動内容や活動時間をもとに、自分の役割について活動の順番を決めたり、スケジュールを組んだりして、自分で活動を進めることができる。</p> <p>②活動の中の報告や相談、友だちと一緒に活動する場面で、適切な表現を用いてかわることができる。</p>	<p>①授業の導入時の説明をよく聞き、自分の役割を理解すると、自分から活動に取り組む姿が見られた。工程や役割を記したカードを並べて、その時間に取り組む順番などを考えたことで、ピザ作りなどの調理活動では、材料・調理器具の用意から調理・片付けまで、自分で順番を考え、友だちと一緒に進めることができた。</p> <p>②困ったときに見ることができるセリフカードを提示したことで、活動中に材料がなくなったり、判断に困ったときにはそのカードをもとに、適切な表現で尋ねたり、相談したりすることができた。</p>

資料-3 本校の個別の指導計画書式・前後期の書式計画 ※前期の例、抜粋

「主体性を引き出す3つの観点」とは…

「動機付け」「理解の促進」「環境設定」

将来の生き生きにつながる、現在の生き生きを育む、「授業改善の観点」です。

「将来像」というキャリア教育の視点をもとに、「将来の『生き生き』」につながる「現在の『生き生き』」を「主体性の発揮」と捉え、その主体性を引き出す授業改善の視点として、「動機付け」「理解の促進」「環境設定」の3点が重要だと考えています。環境を整えることで、理解が促され、また理解が進むことで環境をより捉えやすくなります。「動機付け」を行い、活動・学習の中で「理解の促進」と「環境設定」を工夫することで、さらに「動機付け」が高まり、主体性の発揮へとつながると考えました。

学校研究として、平成25年度から27年度にかけて、この「主体性を引き出す3つの観点」をもとに授業改善に取り組みました。その結果として、課題や活動に取り組む際の児童生徒への支援や指導に対する理解が深まり、「主体性の発揮」という視点から授業づくりを行っています。

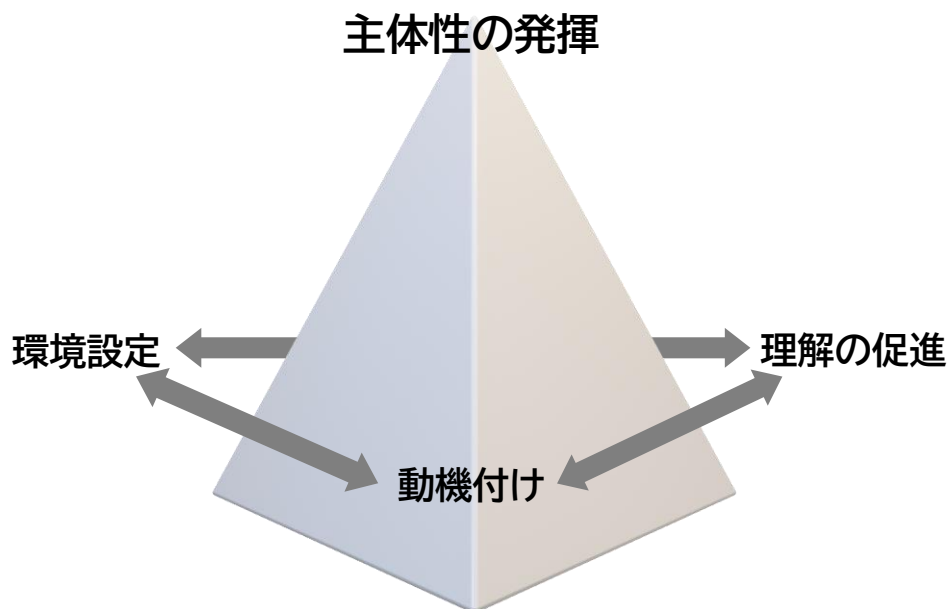


図5 主体性を引き出す授業改善の3つの観点